



## 東京大学名誉教授 東京大学先端科学技術研究センター サービスVRプロジェクトリーダー 廣瀬通孝

情報技術の周辺では常に新しい話題が登場する。昨年メタバースが大きな話題になったかと思えば、今年は年初からChatGPTである。目が回るほどの勢いというほかはない。

こうした変化を繰り返しつつ、情報技術は我々の日常生活の中に着々と入り込んでくるわけで、それらとどう共生していくかを考えていかないといけないだろう。

ChatGPTは、コンピュータとのやりとりを通じて適切な文章をつくり上げていく技術である。自分で文章を作る能力もさることながら、人の介入が重要なので、インタラクション技術の1つでもあると筆者は考えている。

AI技術には2通りの考え方があって、第一は、自律的に動作する賢い機械を作ろうという方向性である。これは人間に代わる機械を作ろうというもので、代替型AIという。第二は、人間と機械が相互にやりとりを繰り返すうちに人間の能力を引き出していくというもので、交流型AIという。

両者とも知能を含む技術であるのは同じだが、代替型AIは、人間がいなくとも動作するので、無人化と

いう毒藥的側面も持つ。それに対して交流型は人間がいなければ機能しないため、最後まで人間は排除されない。

筆者はAIの健全な発展は後者にあると思っている。前者は、工業化時代であった20世紀の無人化効率化思想の延長であって、21世紀にはそぐわないとさえ思っている。

ChatGPTによって多くの職が失われるともいわれているが、そういう方向にこの技術を使うべきではない。むしろもっと創造的な分野にわれわれが頭を使うためのツールとしての未来を見るべきである。ChatGPTは時々間違ふというがそれも面白い。新人学生とのとんちんかんな対話から意外なヒントをもらうこともある。そういう存在であることを頭に入れておけば、大騒ぎするほどのものでもないだろう。

交流型AIで考えておくべきことは、インタラクションによってつくられた知恵を、AIも含めて誰が保有するかがあいまいになる点であろう。作られた成果物はもちろんのこと、そのプロセスにおいて何を聞いたのか、どういう順番で聞いたのかさえ、大きな情報である。その仕組みをChatGPTが学習してしまうわけ

である。

学生を自分の思考の補助に役立てることは、学生を教育していることにもなるのである。力学に作用反作用の法則があるが、インタラクションにも同じ法則が存在する。

今後はAIをどう使ったか、どう行動したかが大きな資産となるだろう。相手が存在する交流や共創、そして共生は難しい。単なる知財権的対立の図式のみではこの問題を解くことができないだろう。この作用反作用の法則を十分に理解することが、今後の世界を生きる鍵となるのではないか。